

日本海沿岸における縄文時代のサメ類利用の総合的研究（平成 28 年度）

中沢道彦・町田賢一・納屋内高史（日本海貝塚文化研究会）

1 はじめに

本研究は平成 27 年度～平成 29 年度において日本海学研究グループ支援事業の支援を受け、日本海沿岸における縄文時代サメ類利用の実態を解明する総合的な研究を行う。

縄文時代においてサメ類は食用として漁撈対象物ではあるが、サメは獰猛で、獲得の漁撈活動には危険が伴うため、捕獲者は漁撈集団の中でも階層としての地位の高さが見通される。また、サメの歯や椎骨を加工した装飾品は、サメ漁撈の危険性やサメの強さから一定の価値をもったものと考えられるが、日本海沿岸遺跡のみならず、例えば長野県宮崎遺跡などでも出土し、日本海側の価値を内陸側もその価値を共有したと考えられる。かつ最近、長野県宝に指定された長野県山ノ神遺跡縄文晩期シュモクザメ絵画土器の製作背景も日本海側の価値を内陸側が認め、独自に展開したものとの評価できる。

つまり縄文時代の日本海沿岸のサメ類利用の研究は、食料獲得の生業研究のみならず、獲得の危険性からサメ製装身具に価値を認める社会があったということで当時の社会組織を考える研究、また内陸部出土サメ関係遺物から日本海側の価値を内陸部でも受け入れたという交流実態解明の研究へと展開できる。

そのため本研究は3つの方向性と目的をもち、研究を進める。

- ①日本海沿岸の貝塚を中心に縄文遺跡出土のサメ類の動物遺存体の資料集成を行い、データベースを作成する。
- ②日本海岸及び隣接する内陸部の縄文時代遺跡から出土するサメ類の歯や椎骨を加工したサメ製装身具の集成、型式学検討、出土状況の検討を行う。
- ③ 縄文時代晩期後半のシュモクザメ絵画土器が出土した内陸部の長野県山ノ神遺跡出土土器や装身具などを再整理する。

2 サメ類出土動物遺存体のデータ集成

平成 28 年度は前年に引き続き、富山県の縄文時代から中世、近世の動物遺存体データを集成するとともに、富山県朝日町境A遺跡、射水市南太閤山遺跡、氷見市大境エンニヤマ下洞窟、富山市北代遺跡に加え、富山市小竹貝塚と5遺跡のデータを集成した。データ集成作業は平成 29 年度以降も継続し、日本海側沿岸の近隣県に対象を広げる。納屋内高史は集成データも踏まえ、富山県氷見市上久津呂中屋遺跡貝層出土の動物遺存体の分析を行い、同遺跡における生業活動の変遷を明らかにした（納屋内 2016）。

また、平成 28 年度は日本海沿岸では、富山県富山市小竹貝塚、石川県金沢市新保本町チカモリ遺跡、新潟県糸魚川市長ヶ原遺跡出土動物遺存体調査を行ったほか、比較資料として長野県栃原岩陰遺跡、長野県宮崎遺跡、長野県大清水遺跡出土動物遺存体の調査を行った。



（富山市小竹貝塚）

1

（富山市小竹貝塚）

2

（新潟県長者ヶ原遺跡）

3

第1図 日本海沿岸縄文遺跡出土のサメ遺存体

3 サメ製装身具の研究

前年に引き続き、日本海岸及び隣接する内陸部の縄文時代遺跡から出土するサメ類の歯や椎骨を加工し

たサメ製装身具の集成、型式学検討、出土状況の検討を行うことで、当時の日本海産サメ装身具の価値の高さを検証するとともに、内陸部におけるサメ装身具の比較を行うことで、日本海産のサメ装身具の価値を共有する内陸部との交流実態を明らかにし、当時の社会組織の復元を目指すことを視野に入れた。特に平成 28 年度は縄文時代のサメ製装身具やサメ類歯などが副葬品として墓坑出土や出土人骨装着の事例を日本列島規模で集成し、第 1 表に概要をまとめた。

北海道ではサメ類歯を用いた頭部用装身具を装着したと考えられる副葬事例が 10 例、東北では秋田県平鹿遺跡の晩期中葉大洞 C2 式のサメ製垂飾品が土壙墓から出土、新潟県堂の貝塚の縄文中期前葉新崎・新保式期の墓坑では貝層下の 6 号の男性人骨に伴い、石鏃 13 点とともに、イタチザメ歯製垂飾が出土する。長野県宮崎遺跡では 5 号土壙墓から熟年男性の上顎犬歯、下顎犬歯、第一小臼歯の 5 号抜歯人骨の右側に赤色塗彩されたサメ椎骨製耳飾が出土する。時期は晩期前葉もしくは晩期中葉である。愛知県川地遺跡では SK02 出土の熟年女性人骨に伴い、サメ・エイ椎骨製小玉状垂飾 18、タヌキ椎骨製小玉 5、ウサギ椎骨 1 が出土した。時期は縄文後期と考えられる。岡山県彦崎貝塚では縄文時代中期初頭船元 1 式の土坑出土、壮年～熟年女性の 4 号人骨からサメ・エイ椎骨製小玉状垂飾が 2 点出土する。なお、同貝塚 1 号人骨、2 号人骨が出土した土坑からも椎骨製小玉状垂飾が出土するが、こちらは帰属が不明である。福岡県山鹿貝塚ではベンケイガイ製貝輪を 19 点装着した若年成人女性の 2 号人骨の頭骨付近から左右 2 点のサメ椎骨製耳飾が出土、ベンケイガイ製貝輪を 15 点装着した成人女性の頭骨右からサメ製耳飾、左猪牙製耳飾が出土している。

日本海側は秋田県平鹿貝塚、新潟県堂の貝塚、福岡県山鹿貝塚例と事例は少ないが、日本列島全体では地方におけるサメ製装身具のあり方は多様である。北海道では日本海・太平洋側を含めて、縄文後晩期にサメ製歯を用いた頭部用装身具を装着した副葬事例が用いられる。九州北部の山鹿遺跡例ではベンケイガイ製貝輪を多数装着した 2 体の女性人骨がサメ椎骨製耳飾を装着する。太平洋側で愛知県川地貝塚出土人骨装着の多数の椎骨製首飾でサメ製椎骨が用いられる。つまり、歯なり椎骨なり素材の差、頭部用装身具、耳飾、首飾・垂飾の差はあるのだが、特定の地で頭髪用装身具、石鏃が多数副葬された者の装身具、貝輪を多数装着した者の耳飾の素材にサメの歯や椎骨が用いられる状況は、日本列島規模で当時、サメ製装身具が一定の価値をもっていたことを確認した。



第 2 図 新潟県佐渡市堂の貝塚人骨出土状況及び出土遺物

4 上久津呂中屋遺跡の研究

前年度の研究で、納屋内高史は富山県富山市小竹貝塚出土の縄文前期後半のサメ類を同定してシロワニを確認、現代の北陸地方において絶滅種のシロワニの存在から、縄文前期後半の気候が温暖であった状況証拠と捉えた。縄文前期の気候は温暖で海進があったとされるが、動物遺存体のサメの種類から納屋内は当時の気候の状況を論じた。

それを踏まえ、納屋内は北陸の日本海沿岸の縄文早期末～中期末の上久津呂中屋遺跡について人工遺物や動物遺存体の時期ごとの変化を追究し、早期末～前期前葉は多様な水域環境が混在する状況 前期末～

中期初頭は干潟状の低湿地、中期末では早期末～前期前葉と同様の多様な水域環境に戻る環境変化を明らかにするとともに、環境が変化する中で集団が従来の生業活動を維持しようとするが、それが限界に達したとき、漁撈活動では汀線付近における貝類採取と深場における魚類捕獲から浅場における魚類捕獲へ転

第1表 縄文時代における人骨共伴や墓壙出土のサメ類製品等の出土事例（未完成）

番号	都道府県	市町村	遺跡名	時期		遺構	人骨				副葬品	サメ歯・製品の 出土状況
				大別	型式		人骨	性別	年齢	属性		
1	北海道	函館市 (旧南茅部町)	ハマナス野 遺跡	前期 中葉	円筒下層 b 式	第15号墳墓底部	なし				ホオジロザメの未穿孔歯 3 点	底部
2	北海道	木古内町	札刃遺跡	晩期	大洞C2式	69号土壙墓底部					メジロザメ属未穿孔歯 1 点	底部
3	北海道	苫小牧市	美沢 1 遺跡	後期 未	堂林式	JX-3 墓壙P-106	なし				土器、叩石、赤漆塗弓 2 本、サ メの歯多数	
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (P-81)	頭骨のみ				メジロザメ属歯 5 点、漆製櫛 1 点	頭骨額からサメ の歯、顎から櫛
4	北海道	千歳市	美々 4 遺跡	晩期 初頭	大洞 B 式	盛土墳墓 (M-3)	4 体以上の 人骨				メジロザメ属歯2点、小玉68点、 土器、石鏃4点、石斧1点	
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (P-66)	頭骨				メジロザメ属歯 9 ～12 点、フレ イク 2 点、玉 2 点	サメの歯は頭骨 の首のあたり
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (P-67)	人の歯 (2体合葬)				メジロザメ属歯11点、漆製櫛 2 点、石斧1点、玉1点、石鏃1点	サメの歯は2プ ロックから出土
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (X205)	なし				メジロザメ属歯2点、勾玉 1 点	
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (P376)	遺体は腐状 に腐食、歯 残存				アオザメ左側下顎歯1点、石棒、 玉38点、石棒 1、土製耳飾 1	
				晩期 初頭	大洞 B 式	土壙墓 (P385)	なし				ホオジロザメ下顎歯1点、石鏃 1、石鏃3、石斧3、叩石6	
5	北海道	恵庭市	柏木 B 遺跡	後期末	堂林式	土壙墓 (1106号)	なし				サメ歯、丸玉30	サメの歯は丸玉 に近接して出土
				後期末	堂林式	土壙墓 (436号)	2体分以上の 人骨				サメ歯、石鏃 1、櫛様漆器 2	サメ歯は櫛用漆 器に接して出土
6	北海道	石狩市	志美第 4 遺跡	晩期 中葉	大洞 C 2 式	第17号墓					アオザメ作用歯・補充歯111点 土器、平玉 4、勾玉 1	
						第24号墓	1 体分				メジロザメ属歯108 (1個体分) 石斧 2、ドリル 1、石鏃51点、 飾弓 2、漆器片 5	
						第27号墓					アオザメ歯36、剥片、漆器、 勾玉 1、丸玉 1	
						第36号墓					アオザメ歯17、	
7	北海道	新ひだか町 (旧静内町)	御殿山遺跡	後期末～ 晩期初頭	御殿山式	第7号墳					サメ歯 7 点	遺体との関係 不明
						B 11号ビット					サメ歯1点、石鏃2点、鏃2点、石 匙2点、アスファルト入り土器	
						C14号ビット D 1 号ビット					サメ歯15点	
8	北海道	釧路市	緑ヶ岡遺跡	晩期末	ヌサマイ式	土壙墓					サメ歯1点（ホオジロザメもしく はメジロザメ属の一種？）	
9	北海道	弟子屈町	屈斜路 コタン遺跡	早期末	東釧路Ⅳ式	土壙墓					サメ歯（ホオジロザメ）	時期要検討
10	北海道	斜里町	朱門栗沢遺跡	後期末	栗沢式	A 号土竈 2 号墳					サメ歯 3、石棒 1、漆器4、玉 6、石鏃 1	
11	秋田県	横手市	平鹿遺跡	晩期	大洞C1式	SK87	なし				ホオジロザメ製垂飾	覆土中部
12	新潟県	佐渡市	堂の貝塚	中期 前葉	新保・新崎式		6 号人骨	男	壮年～熟年	齧歯1本	イタチザメ歯製垂飾 石鏃13点	
13	長野県	長野市	宮崎遺跡	晩期	御経塚式？ 佐野Ⅱ式？	5 号土壙	5 号人骨	男	壮年～熟年	上顎犬歯 下顎犬歯 第一小白歯 抜歯	サメ椎骨製耳飾 (赤色塗彩)	頭骨右側
14	長野県	高山村	湯倉洞穴	早期	押型文土器	Ⅸ層	早期人骨	女性	壮年		メジロザメ歯製垂飾 1、中型獣 四肢骨製管玉 2	確認中
15	静岡県	袋井市	大畑遺跡	後期		1977年 5 号人骨	5号人骨		幼児		椎骨製垂飾（「ドチザメ」軟骨 魚類18）	
16	愛知県	田原市	川地貝塚	後期		SK02		女	熟年		椎骨製垂飾（サメ椎骨製18、タ ヌキ椎骨製 5、ウサギ椎骨製）	
17	愛知県	田原市 (旧蓬美町)	伊川津貝塚	晩期			1922年 16号人骨				サメ椎骨製耳飾左右 1（赤色顔 料塗布）	
18	岡山県	岡山市 (旧瀬崎町)	彦崎貝塚	中期	船元Ⅳ式	散乱骨	瀬崎町調査 1号人骨	男	壮年後半 ～ 熟年前半		エイの椎骨製垂飾 1（共伴不 明）	
				中期 初頭	船元Ⅰ式	土灰	瀬崎町調査 2号人骨	不明	子供		エイの椎骨製垂飾 2、サルボウ 製貝輪片（共伴不明）	
				中期 初頭	船元Ⅰ式	土灰 (3号人骨と合 葬)	瀬崎町調査 4号人骨	女	壮年後半 ～ 熟年前半	経産婦	エイの椎骨製垂飾 2、サヌカイ ト剥片	
19	福岡県	芦屋町	山鹿貝塚	後期	鐘崎式		2 号人骨	女	成年 (20歳位)	抜歯無し	サメ製耳飾 2、緑色大珠 1、鹿 角 2、ベンケイガイ製貝輪19	
				後期	鐘崎式		16号人骨	女	成年	抜歯無し	サメ製耳飾（右） 猪牙製耳飾（左） ベンケイガイ製腕輪15	

平成29年3月現在

換したという生業変化とその背景を明らかにした（納屋内 2016）。

5 内陸部サメ関係遺物出土遺跡と交流

2016 年 10 月 9 日に長野県北相木村中央公民館において、栃原岩陰フェスティバル 2016 が「君は海をみたか」と内陸部洞穴遺跡と日本海側を含む海との交流実態解明をテーマに開催され、町田賢一は「海から見た縄文時代—富山県小竹貝塚から見えてきた縄文人の真相—」を演題に富山県小竹貝塚の概要や縄文時代前期における日本海と内陸部との交流についての基調講演を行った他、トークセッションで北相木村藤森英二学芸員や明治大学藤山龍造准教授と交流実態に関する討論を行った（町田 2016）。討論では栃原岩陰遺跡出土のサメ歯製垂飾未成品をはじめ、中部高地山間部の洞穴遺跡から出土した海に由来する遺物の持つ意味とその評価を検討した。

また、前年度に引き続き長野県飯山市山ノ神遺跡出土資料及び隣接遺跡出土資料の整理を行った。

〔図版出典〕

第 1 図 納屋内高史・中沢道彦撮影（富山市教育委員会所蔵・糸魚川市教育委員会所蔵）

第 2 図 （本間 1977）、中沢道彦撮影（佐渡市教育委員会所蔵）

第 1 表 中沢道彦作成

〔主要参考引用文献〕

川添和暁 2016 「東海地方における骨角製垂飾（玉類）の様相—縄文時代後晩期を中心に—」『玉文化研究』第 2 号—寺村光晴先生卒寿記念号 127-143 頁 日本玉文化学会

中沢道彦 2002 「サメかサケか—飯山市山ノ神遺跡出土魚形線刻画土器をめぐって—」『佐久考古通信』No. 84 4-7 頁 佐久考古学会

長沼孝 1984 「遺跡出土のサメの歯について—北海道の出土例を中心として—」『考古学雑誌』1-29 頁 日本考古学会

中村大介 2012 『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房

橋本博文他 2003 「新潟大学考古学研究室 2002 年佐渡調査報告」『佐渡・越後文化交流史研究』第 3 号 1-57 頁 新潟大学大学院現代社会文化研究科

橋本博文 2016 「考古学からみた佐渡の交流」『人文科学研究』第 138 輯 197-225 頁 新潟大学

藤田富士夫 1998 『縄文再発見』大巧社

福田友之 2000 「津軽海峡とサメの歯—本州北辺地域出土のサメの歯をめぐって—」『村越潔先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会

本間嘉晴ほか 1977 『金井町文化財調査報告書第Ⅱ集 堂の貝塚』金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会

〔平成 28 年度研究実績〕

中沢道彦 2016 「縄文時代食料採集経済説の成立背景」『海と山と里の考古学—山崎純男博士古稀記念論文集—』139-150 頁 山崎純男博士古稀記念論集編集委員会 9 月

中沢道彦 2016 「浮線文土器群の製作復元に向けて」『研究成果公開シンポジウム 土器を掘る』熊本大学小畑研究室 31-36 頁 12 月

中沢道彦 2017 「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』第 138 号 （株）雄山閣 7, 26-29 頁 1 月

納屋内高史 2016 「縄文時代貝塚・貝層から見た北陸地域における生業活動の変遷—上久津呂中屋遺跡で検出された貝層の検討を中心に—」『古代文化』68-2, 古代学協会

納屋内高史・松岡廣繁 2017 「小竹貝塚出土の鳥類遺存体（予報）」『富山市考古資料館紀要』36, 富山市考古資料館

町田賢一 2016 「小竹貝塚からみた縄文人の”持ち物”」『平成 27 年度 埋蔵文化財年報』9-27 頁 公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

町田賢一 2016 「海から見た縄文時代—富山県小竹貝塚から見えてきた縄文人の真相—」『栃原岩陰遺跡フェスティバル 2016』